



Title	地域社会の「国際化」に対する住民の意識
Author(s)	濱田, 国佑
Description	第2部 在日ブラジル人と日本人の関係. 第5章
Relation	日系ブラジル人のトランスナショナルな移動と定住. 小内透編著. (外国人集住地域の社会学的総合研究 ; その8)
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 28, 101-110
Issue Date	2009-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38199
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_p101-110.pdf



第5章 地域社会の「国際化」に対する住民の意識

本章では、外国人集住地域における日本人住民が、地域社会の「国際化」に対して抱いている意識、あるいは外国人住民に対して抱いている意識について、群馬県大泉町、愛知県豊橋市、静岡県浜松市で実施した住民調査の結果をもとに、その特徴を明らかにしていくことにする。

具体的には、まず第1節で、調査対象地の産業構造、外国人比率などの基本的な特性を明らかにする。続いて第2節では、「国際化」の進展による地域社会の変化について、日本人住民がどのような意識をもっているのかということを検討する。第3節では、日本人住民は、外国人住民に対してどのような意識を持っており、そして外国人住民と今後どのような関係を築くことを望んでいるのかということについて、検討を行う。

本章では、2005年に群馬県大泉町、2006年に愛知県豊橋市、2007年に静岡県浜松市中区において実施した、「外国人居住者との交流と意識に関する実態調査」のデータを使用する。

調査の対象となる住民は、大泉町選挙管理委員会、豊橋市選挙管理委員会、浜松市中区選挙管理委員会において、それぞれ選挙人名簿抄本の閲覧・転記を行い、無作為に系統抽出した。群馬県大泉町における調査では1,507人に対して調査票を配布し、540人から有効な回答を得ることができた（回収率35.8%）。愛知県豊橋市における調査では、1,500人に調査票を配布し、473人から有効な回答を得た（回収率31.5%）。静岡県浜松市中区の調査では、やはり1,500人に対して調査票を配布し、515人から有効な回答を得た（回収率34.3%）。

第1節 調査地の特性

群馬県邑楽郡大泉町は、群馬県南東部に位置しており、その南端は利根川を挟んで埼玉県と接している。面積は17.93平方キロ、2005年現在の人口は41,466人である。

大泉町の主要な産業は製造業であり、2005年の製造品出荷額は7,619億円に達している。町内には、三洋電機株式会社の主力工場である東京製作所のほか、富士重工業株式会社の大泉工場が立地している。また、こうした大規模工場のほかにも、町の工業団地には中・小規模の工場が数多く進出している。

2005年の国勢調査における産業別就業人口を確認してみると、第1次産業に就業している人の割合は0.8%、第2次産業の割合が50.1%、そして第3次産業が48.9%となっており、大泉町では、第2次産業に就業する人の割合が最も高くなっている。これは全国平均（26.1%）と比べて2倍近い水準である。また、全就業者に占めるブルーカラー労働者の割合も50.7%に達しており、やはり全国平均と比べて大幅に高い値を示している。このように、群馬県大泉町は、電機および自動車産業を中心とした工業都市としての性格が強い地域であると言える。

愛知県豊橋市は愛知県の南東部に位置しており、その東端は静岡県と接している。人口は、2005年現在372,479人であり、面積は261.35平方キロである。

豊橋市の産業構成を、先ほど同様2005年の国勢調査における産業別就業人口で確認してみると、第1次産業に就業している人の割合は全体の6.8%、そして、第2次産業の割合が35.1%であった。これらは、いずれも全国平均の値（4.8%、26.1%）を上回っており、豊橋市では、第1次産業およ

び第2次産業が比較的盛んであるということがわかる。ただ、群馬県大泉町では、第2次産業の割合が5割を超えていた（50.1%）ことを考えると、それほど工業に特化した地域というわけではない。また、ブルーカラー労働者の割合も37.9%にとどまっており、やはり大泉町ほど高い値を示していない。

豊橋市では、自動車関連部品を製造するアスモ(株)、アラコ(株)、デンソー(株)などの各工場が生産を行っているほか、自動車の物流基地としての役割も果たしている。国内最大規模の自動車港湾である三河港は、蒲郡市、御津町、豊橋市、田原市の4市町に渡って広がっており、国内各メーカーの自動車の積み出し、ならびに輸入自動車の陸揚げを行っている。三河港は、自動車輸出港としては、輸出金額が国内第1位、台数でも、名古屋港に次ぐ第2位の規模を誇っている。また、輸入港としては、金額、台数ともに、2位を大きく引き離し、1位の座を占めている。

静岡県浜松市は、静岡県西部の中心的都市として発展してきた。2005年には、政令指定都市化を目指して、旧浜松市を含む12市町村が合併して新浜松市が誕生し、2年後の2007年には、政令指定都市へと移行している。2005年の国勢調査による、合併後の浜松市の人口は804,032人であり、その面積は岐阜県高山市に次ぐ全国2番目の大きさである。

浜松市の中心的な産業は製造業だと言える。第2次産業就業者数の割合は37.0%、ブルーカラー労働者の割合は36.8%であり、大泉町ほどではないものの、全国平均よりも高い値を示している。また、2005年の製造品出荷額は2兆7,780億円であり、これは全国の自治体の中で8番目に位置する大きな額である。浜松市内には、スズキ株式会社の本社およびその生産拠点、本田技研工業株式会社の浜松製作所、ヤマハ株式会社をはじめとする楽器関連産業の工場などが存在している。

大泉町における外国人登録者の状況を見ると、1989年にはわずか623人に過ぎなかった外国人登録者数が、2006年現在6,753人にまで増加しており、町の人口に占める外国人住民の割合は16.3%に達している。

豊橋市における外国人登録者数も、大泉町同様、1990年前後から増加している。1990年当時の豊橋市における外国人登録者数は4,458人であったが、その後外国人登録者数は増加を続け、2006年現在の外国人登録者は19,240人を数え、市の全人口に占める外国人住民の割合は5.2%となっている。

浜松市でも、1990年当時外国人登録者数はまだ少なく、その数は4,748人であったが、2002年には20,000人を突破し、2007年現在、その数は32,258人にまで増加している。浜松市における外国人住民の割合は、2007年現在3.9%であり、大泉町、豊橋市よりも低い値となっているが、浜松市中区だけに限定すると、その割合は5.7%になる。

表5-1 調査対象地の概要

	大泉町	豊橋市	浜松市中区
人口	41,466	372,479	244,953
人口密度（1km ² あたり）	2,313	1,425	5538
外国人登録者数 ¹⁾	6,753	19,240	14,002
外国人比率	16.3%	5.2%	5.7%
ブルーカラー率	50.7%	37.9%	36.8% ²⁾
第2次産業就業者率	50.1%	35.1%	37.0% ²⁾

2005年国勢調査のデータより作成（外国人登録者数を除く）。

1) 大泉町と豊橋市は2006年12月末時点、浜松市中区については2007年12月末現在の外国人登録者数。

2) 浜松市中区だけのデータは得られなかったため、浜松市全体のデータで代用した。

第2節 地域社会の変化に対する意識

第1項 地域による比較

外国人集住地域の日本人住民は、外国人住民の増加による地域社会の変化について、どのような見方をしているのだろうか。外国人の増加による地域社会の様々な変化について、いくつかの質問項目を用意し、「とてもそう思う」、「ある程度そう思う」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」の4段階で回答をしてもらった（表5-2、表5-3、表5-4）。

結果を確認してみると、外国人の増加による否定的な影響を尋ねた質問において、「とてもそう思う」、「ある程度そう思う」と回答する割合が高いということがわかる。特に、「治安が悪化した」という項目でその割合が高くなっており、大泉町では78.5%が、豊橋市では66.4%が、浜松市では76.4%の住民が、治安が悪くなったと答えている。

表5-2 大泉町の変化に関する意識

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	合計
外国人との交流が進んだ	33 6.4%	200 38.9%	208 40.5%	73 14.2%	514 100.0%
外国の文化に触れられるようになった	21 4.1%	159 31.3%	233 45.9%	95 18.7%	508 100.0%
地域が賑やかになった	57 11.3%	205 40.6%	184 36.4%	59 11.7%	505 100.0%
大泉の知名度が上がった	143 28.4%	223 44.3%	91 18.1%	46 9.1%	503 100.0%
大泉のイメージが良くなった	8 1.6%	49 9.8%	282 56.2%	163 32.5%	502 100.0%
治安が悪くなった	197 38.2%	208 40.3%	90 17.4%	21 4.1%	516 100.0%
生活のルールが乱れた	207 40.3%	161 31.3%	117 22.8%	29 5.6%	514 100.0%
生活環境が悪くなった	116 22.7%	178 34.8%	190 37.2%	27 5.3%	511 100.0%
日本人の仕事が減った	53 10.4%	126 24.8%	260 51.2%	69 13.6%	508 100.0%

表5-3 豊橋市の変化に関する意識

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	合計
外国人との交流が進んだ	17 3.9%	142 32.3%	203 46.2%	77 17.5%	439 100.0%
外国の文化に触れられるようになった	7 1.6%	92 20.8%	225 50.8%	119 26.9%	443 100.0%
地域が賑やかになった	7 1.6%	92 21.0%	238 54.3%	101 23.1%	438 100.0%
豊橋の知名度が上がった	6 1.4%	37 8.4%	270 61.5%	126 28.7%	439 100.0%
豊橋のイメージが良くなった	3 0.7%	25 5.7%	269 61.7%	139 31.9%	436 100.0%
治安が悪くなった	99 22.3%	196 44.1%	124 27.9%	25 5.6%	444 100.0%
生活のルールが乱れた	86 19.5%	150 34.1%	168 38.2%	36 8.2%	440 100.0%
生活環境が悪くなった	52 11.7%	143 32.3%	209 47.2%	39 8.8%	443 100.0%
日本人の仕事が減った	17 3.8%	77 17.4%	265 59.8%	84 19.0%	443 100.0%

表5-4 浜松市の変化に関する意識

	とてもそう思う	ある程度そう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない	合計
外国人との交流が進んだ	19 3.9%	193 39.4%	216 44.5%	60 12.2%	490 100.0%
外国の文化に触れられるようになった	9 1.8%	138 28.3%	240 49.3%	100 20.5%	487 100.0%
地域が賑やかになった	11 2.3%	143 29.7%	237 49.3%	90 18.7%	481 100.0%
浜松の知名度が上がった	19 3.9%	123 25.5%	250 51.8%	91 18.8%	483 100.0%
浜松のイメージが良くなった	3 0.6%	29 6.0%	308 64.0%	141 29.3%	481 100.0%
治安が悪くなった	149 30.2%	228 46.2%	92 18.6%	25 5.1%	494 100.0%
生活のルールが乱れた	115 23.9%	169 35.1%	166 34.4%	32 6.6%	482 100.0%
生活環境が悪くなった	61 12.5%	168 34.5%	219 45.0%	39 8.0%	487 100.0%
日本人の仕事が減った	24 4.9%	68 14.0%	286 59.0%	107 22.1%	485 100.0%

3つの地域を比較してみると、大泉町において、外国人の増加による否定的な影響を感じている人の割合が特に高くなっている。「生活のルールが乱れた」という質問に関しては、「とてもそう思う」、あるいは「ある程度そう思う」と考える人の割合が大泉町では71.6%なのに対し、豊橋市では53.6%、浜松市中区では59.0%となっている。また、「生活環境が悪くなった」という質問でも、大泉町では、「とてもそう思う」、「ある程度そう思う」と考える人の割合が57.5%に達しているのに対し、豊橋市では44.0%、浜松市中区では47.0%と相対的に低い値にとどまっている。

ただ、大泉町の住民の中には、外国人の増加による肯定的な影響を認めるような人々も、一定の割合で存在しているということは注目すべき点である。例えば、「地域が賑やかになったという」という質問に対しては、10%を超える人々が、「とてもそう思う」という回答をしている。これは、豊橋市の1.4%という数値に比べて、非常に大きい値である。また、特に大きく異なっているのが、「知名度が上がった」という質問に対する反応である。大泉町では28.4%の人が、「知名度が上がった」という質問に対して「とてもそう思う」と答えているのに対して、豊橋市では、その割合は1.4%に過ぎない。

こうした結果を見ると、大泉町では、他の地域と比べて、良い意味でも悪い意味でも、外国人住民の流入による地域へのインパクトが非常に強いということがわかる。これは、大泉町における外国人比率の高さを考えれば、当然だと言えるだろう。

ただ、浜松市中区において、「治安が悪くなった」と考える人の割合が大泉町に匹敵するほど多いという点は、単純に外国人比率によって説明することはできない。住民調査を実施した2005年当時、大泉町における外国人比率は15.9%であったのに対し、浜松市中区では、2007年現在、外国人住民の割合は5.6%にとどまっている。それにもかかわらず、浜松市中区において、これだけ「治安が悪くなった」と考える人が多いのは何故だろうか。

そこで以下では、浜松市内において、「治安が悪くなった」という意識に地域差が見られるかどうかを調べてみることにする。以下の表5-5は、「治安が悪くなった」という質問に対する回答を、回答者の居住地域ごとにまとめたものである。カイ二乗検定を行ってみたところ統計的な有意差は

見られず、地域ごとに異なった傾向を示しているとは言えない。こうした結果を見ると、「治安が悪くなった」という意識は、特定の地域においてのみ支持されているわけではなく、浜松市中区の広範な地域において共有されていると言えるだろう。

表5-5 「治安が悪くなった」という質問に対する肯定度（浜松市・地域別）

	治安が悪くなった				合計
	まったくそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う	
中央・県居・西	3 6.7%	9 20.0%	17 37.8%	16 35.6%	45 100.0%
東・江東	2 4.1%	4 8.2%	21 42.9%	22 44.9%	49 100.0%
北・城北	5 8.8%	8 14.0%	32 56.1%	12 21.1%	57 100.0%
駅南・江西	0 0.0%	5 14.7%	19 55.9%	10 29.4%	34 100.0%
萩丘	5 4.2%	21 17.5%	55 45.8%	39 32.5%	120 100.0%
曳馬	3 5.7%	14 26.4%	22 41.5%	14 26.4%	53 100.0%
富塚・佐鳴台	2 4.3%	12 26.1%	23 50.0%	9 19.6%	46 100.0%
合計	20 5.0%	73 18.1%	189 46.8%	122 30.2%	404 100.0%

このような傾向は、大泉町、豊橋市においても見られる。「治安が悪くなった」という質問に対する回答結果が、回答者の居住地域における外国人比率によって異なるかどうかという点を確認してみたところ、大泉町、および豊橋市のいずれにおいても、統計的な有意差は確認できなかった。やはり、大泉町、豊橋市においても、浜松市同様、「治安が悪くなった」という意識が、広範な地域で共有されていると言うことが示唆されるのである。

第2項 個人属性による比較

次に、個人属性によって、このような地域社会の変化に対する諸意識に差は生じているのか、という点を確認してみることにする。以下の表5-6は、「治安が悪くなった」という質問に対する回答を職業別にまとめたものである。また、表5-7は、同じ質問に対する回答を、回答者の学歴別にまとめたものである。

これを見ると、「治安が悪くなった」という質問に対して、「とてもそう思う」と答えた人の割合は、ブルーカラー職において、とりわけ高くなっていることがわかる。学歴別では、高卒の場合に、「とてもそう思う」と回答する人の割合が高くなっているのに対して、学歴が大卒である場合、その割合がもっとも低くなっている。つまり、学歴が相対的に低い場合、あるいは職業がブルーカラー職である場合、「治安が悪くなった」と感じる人の割合が高くなるのである。こうした層にとって、外国人住民の増加という事態は、職場などにおける直接的な競合関係が発生する可能性を含んだ問題である。こうした「脅威」の認識が、外国人住民の増加による否定的な影響の存在を強く表明させているとも考えられる。

表5-6 「治安が悪くなった」という質問に対する肯定度（職業別）

		まったくそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う	合計
職業分類	ホワイト 常雇	14	106	172	125	417
		3.4%	25.4%	41.2%	30.0%	100.0%
	ブルー 常雇	9	35	70	67	181
		5.0%	19.3%	38.7%	37.0%	100.0%
	自営・農業	15	30	68	53	166
		9.0%	18.1%	41.0%	31.9%	100.0%
	パート・ 無職他	32	126	307	185	650
		4.9%	19.4%	47.2%	28.5%	100.0%
合計		70	297	617	430	1414
		5.0%	21.0%	43.6%	30.4%	100.0%

p=.014（カイ二乗検定）

表5-7 「治安が悪くなった」という質問に対する肯定度（学歴別）

		まったくそう思わない	あまりそう思わない	ある程度そう思う	とてもそう思う	合計
学歴	義務教育	14	33	58	46	151
		9.3%	21.9%	38.4%	30.5%	100.0%
	高等学校	23	113	270	207	613
		3.8%	18.4%	44.0%	33.8%	100.0%
	短大・高専 専修学校	14	65	139	101	319
		4.4%	20.4%	43.6%	31.7%	100.0%
	大卒以上	18	88	151	84	341
		5.3%	25.8%	44.3%	24.6%	100.0%
合計		69	299	618	438	1424
		4.8%	21.0%	43.4%	30.8%	100.0%

p=.014（カイ二乗検定）

第3節 外国人住民に対する意識

第2節では、外国人住民の増加によって引き起こされた地域社会の変化について、日本人住民がどのような意識を持っているのかということについて、検討を加えてきた。そこで、第3節では、こうした日本人住民が外国人住民に対してどのような意識をもっているのか、また今後外国人住民との間にどのような関係性を築こうとしているのかという点について、地域あるいは個人属性による差異に注目しながら検討を行うことにする。

第1項 地域による比較

まず、今後の外国人の受け入れについてどのような意識を持っているか、という点について確認してみたところ、地域によって明確な差が見られた。豊橋市、および浜松市では、今後外国人の受け入れを減らすべきだと考えている人の割合は、いずれも約3割であるのにたいして、大泉町では、その割合は46.9%に達している（表5-8）。

このような、大泉町における外国人住民に対する排他的意識の強さは、一般的に考えれば、やはり大泉町における外国人比率の高さに起因すると言えるだろう。先に述べたように、群馬県大泉町における外国人住民の比率は2005年現在、15%を超える状態にあり、豊橋市の5.0%、および浜松市中区の5.6%という数値と比べて、突出して高い値となっている。こうした環境が、大泉町における「外国人の受け入れを減らすべきだ」という意識につながっているものと考えられる。

ただ、地域における外国人比率の高さが、直接的に外国人住民に対する排他的意識へと結びついているかという点、必ずしもそうとは言えない。以下の表5-9は、大泉町における「外国人の受け入れ」に関する意識を、居住地域の外国人比率ごとにまとめたものである。クロス集計表の検定において統計的な有意差は確認されておらず、居住地域の外国人比率が高いほど、外国人に対する排

他意識が強いとは言えないということがわかる。実際、数値を確認してみても、「外国人の受け入れを減らすべき」だと考える人の割合が、外国人住民の比率が15～20%の地域で最も低くなるなど、一貫した傾向を示していない。このように、大泉町における外国人に対する排他的意識は、確かに他の地域よりも強いということが確認されるものの、こうした意識は外国人住民の比率が高い地域で集中的に見られるというわけではなく、大泉町の全域において、広く共有されているものだと考えることができる。

表5-8 今後の外国人の受け入れについて

		増やすべき	現状維持	減らすべき	合計
調査地	大泉町	7	273	247	527
		1. 3%	51. 8%	46. 9%	100. 0%
	豊橋市	19	309	129	457
		4. 2%	67. 6%	28. 2%	100. 0%
	浜松市	62	273	158	493
		12. 6%	55. 4%	32. 0%	100. 0%
合計		88	855	534	1477
		6. 0%	57. 9%	36. 2%	100. 0%

p<.001（カイ二乗検定）

表5-9 今後の外国人の受け入れについて（外国人比率別・大泉町）

		現状維持・増やすべき	減らすべき	合計
外国人比率	5 %未満	21	19	40
		52. 5%	47. 5%	100. 0%
	5 ～10%	57	47	104
		54. 8%	45. 2%	100. 0%
	10～15%	82	84	166
		49. 4%	50. 6%	100. 0%
	15～20%	55	36	91
		60. 4%	39. 6%	100. 0%
	20～25%	26	26	52
		50. 0%	50. 0%	100. 0%
	25%以上	21	23	44
		47. 7%	52. 3%	100. 0%
合計		262	235	497
		52. 7%	47. 3%	100. 0%

p=.595（カイ二乗検定）

第2項 個人の属性による比較

それでは、個人属性によって、こうした外国人に対する意識に差が生じているのだろうか。

以下では、まず、職業によって外国人に対する意識がどのように異なるかを確認してみることにする。表5-10は、「外国人の受け入れ」に関する意識を、そして表5-11は、今後の「外国人との交流」に関する意識を、それぞれ職業ごとにまとめたものである。

これを見ると、職業がホワイトカラーの場合、外国人の受け入れを「減らすべき」だと考える人の割合が他の職業よりも低く、また、外国人と「交流するつもりはない」と考える人の割合も、同様に他の職業より低くなっていることがわかる。一方、外国人の受け入れを「減らすべき」だと考える人の割合がもっとも高かったのが、ブルーカラー職であった。先に述べたように、ブルーカラー職は、外国人住民の増加によって、直接的に競合関係に立たされる可能性がある職業であり、こうした状況が、受け入れを「減らすべきだ」という意識を増幅させているという解釈をすることができる。

ただ、外国人との交流に対しては、それほど消極的ではない。今後、外国人と「ある程度の交流をしたい」と考える人の割合は40.0%であり、ホワイトカラーに次いで高くなっているのである。一方、外国人との交流に関してもっとも消極的なのは、自営業、および農業に分類される人々であり、28.6%が今後交流するつもりはないと答えている。

こうしたブルーカラー職の人々の意識は、現実には職場で外国人労働者と接しているからこそ、生じたと言えるのではないだろうか。外国人労働者が多い職場で働くブルーカラー職の人々は、確かに、外国人の受け入れ増加という事態には危機感を覚えていると言えるだろう。しかしながら、日々外国人労働者と接する中で、ある程度の交流は持っていきたいという意識もまた、同時に保持しているのである。

表5-10 今後の外国人の受け入れについて（職業別）

		増やすべき	現状維持	減らすべき	合計
職業分類	ホワイト常雇	33 7.9%	255 61.2%	129 30.9%	417 100.0%
	ブルー常雇	10 5.5%	85 46.7%	87 47.8%	182 100.0%
	自営・農業	7 4.1%	88 52.1%	74 43.8%	169 100.0%
	パート・無職	38 5.7%	399 60.2%	226 34.1%	663 100.0%
	合計	88 6.1%	827 57.8%	516 36.1%	1431 100.0%

p=.001（カイ二乗検定）

表5-11 今後の外国人との交流について（職業別）

		積極的に交流したい	ある程度の交流をしたい	必要最小限の交流にとどめたい	交流するつもりはない	合計
職業分類	ホワイト常雇	13 4.5%	138 48.1%	116 40.4%	20 7.0%	287 100.0%
	ブルー常雇	2 2.4%	34 40.0%	34 40.0%	15 17.6%	85 100.0%
	自営・農業	5 5.1%	25 25.5%	40 40.8%	28 28.6%	98 100.0%
	パート・無職	9 1.9%	149 32.0%	223 47.9%	85 18.2%	466 100.0%
	合計	29 3.1%	346 37.0%	413 44.1%	148 15.8%	936 100.0%

p<.001（カイ二乗検定）

次に、回答者の学歴による意識の差を確認してみることにする。以下の表5-12、および表5-13は、回答者の学歴別に、今後の「外国人の受け入れについて」、および今後の「外国人との交流について」の意識をまとめたものである。

結果を見ると、学歴が大学卒である場合、外国人に対する排他的意識は相対的に弱くなっているということがわかる。今後の「外国人の受け入れ」に対して、「減らすべき」だと答えた人の割合は、大学卒の場合24.8%にとどまっており、もっとも低い値となっている。また、今後の「外国人との交流」に関しても、「交流するつもりはない」と答えたのは5.8%であり、他の学歴に比べて大幅に低い値となっている。

このように、回答者の学歴が相対的に高い場合、外国人に対する排他的意識は弱まるという効果が確認されたと言えるだろう。

表5-12 今後の外国人の受け入れについて（学歴別）

		増やすべき	現状維持	減らすべき	合計
学歴	義務教育	5	89	68	162
		3.1%	54.9%	42.0%	100.0%
	高校	30	343	244	617
		4.9%	55.6%	39.5%	100.0%
	短大・高専・ 専修学校	17	178	126	321
		5.3%	55.5%	39.3%	100.0%
	大卒	32	226	85	343
		9.3%	65.9%	24.8%	100.0%
合計		84	836	523	1443
		5.8%	57.9%	36.2%	100.0%

p<.001（カイ二乗検定）

表5-13 今後の外国人との交流について（学歴別）

		積極的に交流したい	ある程度の交流をしたい	必要最小限の交流 にとどめたい	交流するつもりはない	合計
学歴	義務教育	2	22	44	33	101
		2.0%	21.8%	43.6%	32.7%	100.0%
	高校	8	126	182	74	390
		2.1%	32.3%	46.7%	19.0%	100.0%
	短大・高専・ 専修学校	7	73	84	30	194
		3.6%	37.6%	43.3%	15.5%	100.0%
	大卒	10	122	94	14	240
		4.2%	50.8%	39.2%	5.8%	100.0%
合計		27	343	404	151	925
		2.9%	37.1%	43.7%	16.3%	100.0%

p<.001（カイ二乗検定）

第4節 まとめ

本章では、外国人集住地域における日本人住民が、地域社会の変化にたいして抱いている意識、あるいは外国人住民に対して抱いている意識について、アンケート調査の結果を利用しながら、検討を加えてきた。

まず、こうした外国人住民に関する意識は、職業や学歴といった個人属性によって、異なる傾向を示しているということが明らかになった。

職業による差異としては、職業がホワイトカラーである場合、地域社会における外国人住民の増加に対して、それほど否定的な反応を示していないということが明らかになった。一方、ブルーカラー職の場合、「外国人の受け入れ」に対しては否定的な意識を強く持っていたものの、「外国人との交流」に対しては、ある程度積極的な姿勢を示していた。ブルーカラー職の場合、職場で外国人労働者と接する機会が多く、こうした経験が、交流に対する積極的な姿勢につながっていると考えられる。

一方、学歴について見ると、学歴が高いほど、外国人住民の増加に対して否定的な意識を持つ人が少なくなるという傾向が見られる。今後の外国人住民との交流に関しても、学歴が高いほど、とりわけ大学卒の学歴を持つ人は、ある程度の交流を望んでいるということが明らかになった。

このような個人属性による意識の差が確認される一方で、居住地域による意識の差も見られた。

大泉町、豊橋市、浜松市という3つの地域を比較してみると、とりわけ大泉町で、外国人の増加による否定的な影響を感じる人の割合が高く、また、今後の外国人の受け入れに関しても、「減らすべき」だと考えている人が多いということがわかった。3つの調査地域の中で、大泉町における

外国人住民比率は突出して高くなっており、こうした外国人比率の高さが、外国人に対する排他的意識を生み出す要因になっているようにも思われる。しかし、問題はそれほど単純ではない。大泉町内における居住地域ごとの外国人比率による意識の差異を調べてみたところ、統計的な有意差は見られなかった。つまり、大泉町における外国人住民に対する排他的意識は、外国人住民の比率が高い地域においてより強まっているというわけではなく、大泉町の全域において、広く共有されているのである。

ただ、その一方で、大泉町の住民の中には、外国人の増加による肯定的な影響を認めるような人々も、一定の割合で存在しているのである。「地域が賑やかになった」、あるいは「町の知名度が上がった」という質問に対して肯定的な回答をした人の割合は、他の地域の結果を大きく上回っている。

このように3地域を比較すると、地域による意識の差が非常に大きいということがわかる。この場合の「地域」とは、自治体の単位としての地域である。一方、より小さい居住単位としての地域は、それほど影響を与えていなかった。つまり、地域住民の意識の形成に際しては、「地域」という変数が少なくない影響を与えているのである。今後さらに、この「地域」の実態と、「地域」が住民意識に与える影響について、検討を続けていく必要があるだろう。この点については、今後の課題にしたい。

(濱田国佑)